

初夏日記

六月五日。

おとゝひ着替へたるネルの、朝はまだ稍々肌寒きを覺ゆれども、硝子戸品よき洋物店に、シヨールのかげは見えずなりて、かざられたる夏帽子など、白々たるがいと晴々し。そよ何となう夏めきたりき。さびたりし八百屋の店に、蠶豆青々と盛られて、やうやうに生氣つかむとす。堆き夏蜜柑の色何となく胸を透かす心地ぞする。

お針の師訪ふと茲に三年、通ひなれたる通り横町の今朝ふと氣まぐれに戸數を數へ見ぬ。まづ芝居のビラ翻る角の茶屋よりはじめて一軒二軒、かくて學校の前角まで、五日ばかり前空きたる家もろともに廿八軒、横なる道を後にして、學校の脇道に入れば、端なる家は、戸に桑仲買のまづき文字。それより五軒と數へてほと息切りたる時、顔のみ馴染の赤き手からの若き妻、爐の火つくろふ火箸の手とめて、愛らしき鐵漿の齒現はしぬ。此家、店なる品は、下れる草鞋に、並べるマツチ、棚に蠟燭あり、塵紙あり、さてはいろいろと箱に駄菓子、乾つく咽喉に盛り切一ぱいの魚には鮓、よろづ間に合ふと、近在通ひの馬子達がお得意なり。まこと夏なり、こゝに蒸し芋の息たゝずなりて、かはりに出でしは桶の水にとろてん、棚なる徳利に口したる杉の葉も青々敷う、戸には某呉服店の、夏物賣出しのしの字大なり。

ひとり離れて杉垣圍ひの、師の君が家まで、棟割長屋十七と數へられぬ。

此夕夕立あり、雷遠くに聞ゆ。

母君のセルやうやう縫ひ上りたれど、共襟かけだけ残りぬ。

同、六日。

肥りっぱの其體には、前衿の大巾ならではなどゝ、人惡るく姉上擲擲ひ給ふに、耳を塞ぎて急ぎ家を出づれば、憎らしや猶、笑ふ聲の耳に響き来る。

令嬢氣取りてなど、母上のたまひ乍らも、望めりし被布、縫ふべく今日は許されぬ。袖丈は五分つめよとなれど、今年二年はと何となう心細し。

彼の家に、かの若き妻の姿は見えず。一臺二臺道塞ぐるが常なる荷馬車の影もなく、人もあらず、家のうち何となう静けき様なり。二三軒過ぎてふと振り回り見たる時、笄長きおばこ髪の老婆、急ぎ彼の家に、はいるを見る。さてはとまた見回られぬ。いよゝ彼の妻産氣つきたるなるべしと、末子と生れたる身は産の如何なるものかを知らず、人事乍ら氣遣

し、たゞ安かれと心に念じて。

話の切れ目切れ目を針の手とめては彼の人は如何したらじ、早や産れてか等と氣を揉むを、人々はお可笑しと笑ひ給ふ。

さては彼れは貴女のお姉様？　などゝ我顔覗き込む君の笑み憎らし。仕返しに、蚤の磔を、君の針さしにさして遣りぬ。

三時頃、落ち來りし一粒二粒、思ひ返して空はまた晴れつ、届け呉れたる傘、徒らに邪魔となりぬ。

同、七日。

來客の爲め、少し後れて行けば、日は校庭に葉櫻の影黒う、小さき女生徒の體操初められてあり。見遣りつゝ歩みを運べば、彼の家に赤兒の泣く聲我を驚かしぬ。さてこそと胸は躍りつ、見れば出商ひに留守勝ちの夫、父なる人、爐の傍に柴折りて居ぬ、耳はひたすら奥にや傾く、子供一人店に立ちたるを、と思ふ時、軽く我肩を打つ人あり、驚きて見れば富子の君、また一つ軽く叩きて、お目出度うと、何かは知らず、顔見合せて失笑しぬ。秋の鹿々かしき、折角楽しみの辨當解けば、菜入はたゞ白く綺麗に、今朝の忙しさは承知乍ら、人ある如く罵しれば、師の君笑ひて煮豆を給ひぬ。

夜、郭公二聲聞きたり。

同、八日。

朝より暖き日なり。途中、何處よりか首輪なき巨犬我が前になり後になりす。在所の母ならんか彼の家に面影似たる中年寄の働くを見ぬ。ふと見れば御燈明あかあかと照り輝きて、白き紙は神棚に貼られたり。いよゝ名は付けられたるらしと、まぐさ喰む馬の背のかげ、身を反らして凝視れば、一、出生、千代の墨跡鮮かに、さては同じ運命の女なりしかと打ち微笑まれぬ。

同、九日。

我物なればか、常よりは捗ゆきて、午少し前被布は仕上りぬ。初のハイカラなどゝ貶されたれど裏の白きは紫紺に映えたり。

歸り路、馬場なる叔母上尋ねてお團子の馳走になりつ、豊様の飛白の四つ身頼まれて歸る。

夕げの終つたる頃より強き雨あり。雷光頻りにす。

同、十日。

牡丹は亡び、躑躅散り、花かつみまた色褪せて、檜扇やうやう丈延びたり。

心地よき好天氣。

襦袢干されたる彼の家の裏にも、撫子の色あざやかなるを見て。

同、十一日。

師の君が許に人の來て、毎田川の菖蒲、今盛りなりと傳ふ。近く率てゆかむと約し給ふ。

同、十二日。

清子君の急ぎのもの手傳へたれば、歸りは早や街に電氣つきぬ。

歸り見れば、西の京なる従姉より小包着きてあり。急ぎ開き見れば優しき女持ちの扇一對嬉しきこと限りなし。母上は添へられたる手紙の手蹟を褒めて、少し心せよと我を嗜め給ふ。故とにはあらざりしかど、夜、久々にて雁のゆきかひを繙きぬ。

同、十三日。

朝髪結ひに行く。きけば往復六日かけて、東京に行き來りし由、様々と達者なる話あり。

われは桃割に結ぶ。義夫の運動襦袢衣作るべく、白いキヤラコ求めて午後よりゆけば、人々明日は花菖蒲見とて、さゞめき合ひ居ぬ。

明朝は降るなど心に祈りてきて床に。

同、十四日。

八時家を出でぬ。一行に例の小夜子の君居たれば、名高き氣取りやの君も、半巾口をはなれざりき。晴れと着かざりし人々、此地にも流行の潮は流れて、オリブの洋傘、七分をしめぬ。

行程一里半、園につきたる時はすでに十一時過ぎなり。去年よりは花輪大きけれども惜しや開き過ぎたるうらみあり。主人は云ひぬ二三日前が見頃なりしと、さもあるべし。

空じき腹は鮎に膨らみたれど、冷たき水の戀しさに一人草履つきかけて、松の木蔭を彷徨ひぬ。先刻茶屋の女の手桶を下げてこゝより出でたるを見たれば、狭き一すぢの道を見

出で、柔き土踏みて、奥へ奥へと入れば、名も知らぬ小さき紫の花咲き亂れて、檜の樹、松の樹、追々に繁し、振りかへり見れば遙かなるところ、茶屋の白幕うちそよぐのみ、林の中、身に纏へる浴衣ゆかたの白きが氣味惡るし。清水などあり得べくも見えざれば、戻らんとそと立ち止れば、ふと目に入りし古き井戸、それよとばかり小走り寄らんとせしも、朽ちかけたる井桁を蔽ふ熊笹の繁り、一もと大きく松樹まつのかげ、邊り小暗きやうなるに折からとて心淋しう、さては深碧しんぺきゆるがぬ井の水に、七草模様の衣亂れて、眞白き面におどろとかゝる黒髪くろかみの……などゝまざまざ胸にうかびて堪え難う、身を顫ふるはして一二歩通りぬ。折しもはるかに絃歌の聲。迷ひたる旅人の人里近きを知りたる時の如、俄に心強う、思ひ返して近寄りつゝ繩のみ新らしきつるべ下せば、鏡は割れて我顔は砕けぬ。水は冷たし心地よし。後れ毛かきあげまた水の面を覗き見れば、松の影、笹の影、ゆらゆらゆらと稍々に静けし。汗おさまりたる身を、やがて菖蒲のかげに現はせば、人々何處いづくにとて顔打ち見成る。それよ人々、うかべる其微笑みを何と見し。

女の足の遅れがちに、町に入りたる頃は灯ともされぬ。

湯に入りたれど足重し。

直ちに前後も知らず……………。(十五日記)

同、十五日。

ふと目覺れば折しも鳴り出したる柱の時計、八つと數へられたるに驚きて飛び起ぐれば、足の重きに昨日を思ひ出されぬ。楊枝口に、井戸端に至れば、珍らしや桶の水に一八美し。今し方六軒の爺ぢいが我にとて持ち來りし由、水汲める秋は云へぬ。さるにてもいたら寢過ぐごしたるものかなと心恥かし。進まぬ朝げすませば、花の師、毎田川の歸りなりとて寄らる、白の蓑つばみ、四五本携たづさへ給ひたれど露は早干はやひてあり、幸ひに彼の一八逆勝手に生けぬ。

裁縫は休みつ、夕げ後、用ありて、師の許訪はんと例の道何氣なく行きしが、ふとあるものを見出で、我身はそこに釘づけにされぬ。

見よ二日見ぬ此家のこの光景ありさまを、閉ざされし戸は靜に開けられて、香の香こもる灯はさと黒き道を割りつ地に長う影うつしたるは僧なり。續けるは老爺らうや、その背に負ひたる小箱はそも何ぞ、蔽ひたる白布しらぬのにそれと知らるゝ柩ひきこにあらずや、さらば何人の？ 問ふまでも無し、打ちかけたる花色染めの一つ身は、生るべき子の玉肌包むと、或る日膝にひろげて彼の妻の、鈍き針先を油の髪に通すを見たりしそれなるを。

あゝ千代子は死したるなるか。それよ健すこやかなりとのみ、一昨日の夕方美しき車の止まり

居たりしも醫師のそれとは氣づかざりしが……。若者の持ちたる笹の、白張提灯ゆらめきいで、朧ろに蠟燭の火は透きて見ゆ、送る人はたゞ二人、鐘の音細く僧に従きて、今と立ち行く冥府の門出、喪簾の影、人の影するは母か、祖母か、あはれさめざめと忍び泣く音の……見上ぐれば星の瞬き夢の如。夢見心地に我もまた柩に従きぬ。

笹さらさらと風に鳴いて、心あるや冥路を導く灯のたゆたひ、もの言はぬ人々の顔の白う、柩負ふ老爺の草鞋踏みしむ音は、露、苔すべる冥府の岩戸に洞より返して響く足音、魂やさまよひ出でんかと、身のうちさつと水を浴びぬ。道分るゝところ、のぞめば遙に森のかげ黒う、こそよ千代子が墳墓所。柩は靜に道を入りぬ。

暫くは見送られつ、實にはかなき汝が運命よ、生れ出でゝ僅かに九日、十日、さとも世のけがれを知りて姿なき慈母の膝下に急ぐか、さらでもあれ、残されし汝が母の、汝が父の、悲嘆はそも幾何ぞ、今宵この柩見送らんとては十月の苦しみはせざりしものを、此世に面は見ざりしとても、前の世慈しみし汝が運命の、あまりにはかなきを我は悲しむ、魂よ迷はで往けとばかり、佇む袖をふく涼風に、忘れし我にかへりぬ。

宵に見しこと、胸にうかび目にうつり、目に冴ゆる夜なり。

同、十六日。

行きも歸りも彼の家の戸は閉されたり。

過ぐる雪の日のつれづれに、誰やらが發議の阿彌陀鬨、我可笑しくも使の鬨にあたりて詮方なく詮方なくお薩をと面赤めて、彼家の店に立ちたりしが其折よ、お寒きところをといろいろ勞らひし彼の妻の、好いたらしうと思ひし心、日々に面を見交しては、悲しみもはた歎きも人事ならず思はるゝぞかし。

子を失ひし母人よ、恙なくてか。

夏は漸々暑からんとするを。

底本…「水野仙子全集」第四卷

初出：「女學世界」明治四十一（1908）年六月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年五月二十二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)